

社会福祉施設訪問布教法話

平成 21(2009)年2月18日

堅田 玄宥

1.はじめに

(1)皆様、こんにちは。ご機嫌はいかがでしょう。

私の母親も只今介護施設でお世話になっています。昨年半ばにお風呂で骨折して病院に入院しましたが一か月たっても二か月たっても治りません。

リハビリを兼ねて介護施設に移りましたが、だんだん寝たきりになってしまいました。

私は仕事がありますので滅多に施設に足を運ぶことができないのですが、顔を見ると私と認めて表情が変わります。

2.朝ドラから

さて、皆さんは、毎朝、顔を洗って、仏様にお参りして、朝ご飯を食べた後、何をなさいますか。テレビの番組はご覧になっていますか？

朝ドラが好きな人一度手を挙げてみて下さい。聞いてみましょう。

— 去年の朝ドラは何だったでしょうか。

「どんと晴れ」という青森の老舗旅館の加賀美屋さんを舞台にしたお話ですね。

なつみさんが若女将(わかおかみ)修行をする番組でしたね。

この番組では「ざしきわらし」というお化けがときどきでてきましたね。

「ざしきわらし」という愛くるしいお化けが住みついたおうちは豊かになるけれども、立ち去るおうちは家運が傾くのだそうであります。

では、去年の朝ドラはなんだったでしょうか。

「ちりとてちん」という若狭塗箸と落語のお話でしたね。

覚えていらっしゃるでしょうか、和田きよみちゃんというおっちょこちょいの女の子が大阪に出て落語の草若師匠のもとで草草くんたちと一緒に落語をやるお話でしたね。草若師匠は「愛宕山」という落語が得意でしたね。

野辺へ出て参りますと言うと春先のこととて

空にはひばりがぴーちくぱーちく

下には蓮華タンポポの花盛り

遠山にはこー霞が帯を引いたよう

麦が青々と伸びた中を

菜種の花が彩っていようという本陽気

やかましゅういうてまいります

その道中の陽気なこと

「やかましゅういうてまいります、その道中の陽気なこと」というくだりは

「地獄八景亡者の戯れ」という落語にもでてまいります。

地獄行きの道中でさえ、笑いに変えてしまうという上方の庶民の伝統があります。

そして今年はだんだんです。

「だんだん」は、島根弁で「ありがとう」という意味だそうです。

3. あの子はたあれ

では皆さん、ここで、両手を上にあげてそのままの姿でうーんと背伸びしてみてください。はい、大きく息を吸って吐き出してみましょう。少 - し、気分がよくなりましたか。ここで、一つ昔懐かしい調べを口づさんでみましょう。皆さん欲ご存じの「あの子はたあれ」という曲です。

細川雄太郎作詞、海沼 実作曲

一、あの子はたあれ たれでしょね
 なんなんなつめの花の下
 お人形さんと あそんでる
 かわいいみよちゃんじゃ ないでしょか

二、あの子はたあれ たれでしょね
 こんこん小やぶの細道を
 竹馬ごっこで あそんでる
 となりのけんちゃんじゃないでしょか

三、あの子はたあれ たれでしょね
 とんとん峠の坂道を
 一人でてくてく あるいてる
 おてらのこぞうさんじゃ ないでしょか

なんという懐かしい調べでしょう。

今日はこのうたにみなさんのお名前を入れてうたってみましょう。

……おばあちゃんとおじいちゃんのお名前を入れてみんなで歌います……

ところでこの詩は滋賀県出身の方がお作りになったことをご存じでしょうか。

滋賀県日野に生まれた細川雄太郎さんは、幼くして父を失った細川さんは妹と二人、助産婦のお母さんの手一つで育てられました。

やがて長じて、近江商人の伝統に従いお店(たな)勤めで群馬県蕨塚本町の醸造会社に奉公に出かけました。

家族と別れ、住み込みで働き始めました。

郷愁募る夜半に近くの小学校の先生が吹くハーモニカに呼び覚まされて細川さんは作詞を始めました。

作詞は深夜、会社の二階の大部屋で、同僚が寝静まった頃、明かりが漏れないよう、布団の中に電灯を下げてはノートを開きました。

「あの子はたあれ」は、その頃、郷里を思い出しつつ綴った作品でした。

細川さんはやがて召集され、戦争が終って無事郷里に帰ってみえました。

戦後になって「あの子はたあれ」は川田正子、孝子姉妹の歌声でヒットしました。

たのは戦後のことだったといえます。

群馬県蕨塚には今、「あの子はたあれ」の歌碑が建てられています。

歌詞に昇る**ナツメの木**は今は日野の郷で青々と葉を茂らせて居ます。
 今は5mにもなるその木は細川さんが奉公に出る頃はほんの背丈位だったといいます。
細川さんが辿った半世紀に及ぶ人生の重みが私たちの胸を揺るがします。
 作詞者細川さんの子息は、私のお寺の坊守が昔高校で同級だったそうです。
 懐かしいお話はまた、遠くて近いお話でありました。

4. 鶴の恩返しのお話

それでは、次に昔話を一つご紹介しましょう。

今日は鶴の恩返しというお話です。

昔々、あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。

二人は貧しかったけれどもとても親切でした。

ある寒い雪の日、お爺さんが町へ薪を売りに出かけた帰りのことです。

雪の中に何かが動いているのを見つけました。

「あれは何だろう。」

お爺さんはわなにかかっている一羽の鶴を見つけました。

「おうおうかわいそうに」

動けば動くほどわなは鶴を締めつけます。

お爺さんはとてもかわいそうに思いました。

「じっとしていなさい。動いてはいかん。今助けてやるからなあ。」

鶴を助けてやると、鶴は喜んで飛んでいきました。

家に帰ると、お爺さんはその話を婆あさんにしました。

「今日はよいことをした。わなにかかった鶴を助けてやった。」

その夜のことで、戸口をトントンとたたく音がしました。

「だれでしょう。」とお婆さんが扉をあけてみると、若い娘が立っていました。

「夜分すみません。友達を尋ねてこの村に来たのですが、雪が激しくて道に迷ってしまいました。今バン一晚ここに泊めてもらえないでしょうか。」

「今夜は特に冷える。さあ入んなさい。

ごらんの通り貧しくて十分な布団はありませんがよかったら泊まっていきなさい。」

「では御言葉に甘えて泊まらせて戴きます」といって一夜の宿をとったのです。

けれども次の日も、また次の日も雪は降り続き数日が過ぎました。

娘は、心優しく二人のために炊事、洗濯、何でもしました。

寝る前にはお爺さん、お婆さんの肩をやさしく揉んであげました。

子供のいない二人は、わが子のように思いました。

ある夜のことで、娘はこう言いました。

「私は綺麗な布をおりたいと思います。

糸を買ってきてくださいな。」

お爺さんはさっそく糸を買って来ました。

作業を始めるとき、こう言いました。



「これから、機をおります。
その間は、決して部屋をのぞかないでください。
決して覗かないと約束してくださいね。」
「判った。約束するよ。」とお爺さんとお婆さんは応えました。
娘はその日から部屋に閉じこもると一日じゅう機をおり始めました。
夜になっても出て来ません。
次の日も次の日も機をおり続けました。
お爺さんとお婆さんは機の音を聞いていました。
三日目の夜、音が止むと一巻きの布を持って娘は出てきました。
「お爺さん、お婆さん、見てください。編みあがりました。」
それは実に美しいままで見たことのない織物でした。
「何と美しいこと。こんな素晴らしい織物を見るのは初めだ」とお爺さん御婆さんは感嘆の声をあげました。
「これは鶴の織物と言うものです。
町に行って売ってみてください。
そしてもっと糸を買ってきてください。」
次の日、お爺さんは町へ出かけました。
「鶴の織物はいらんかね。鶴の織物はいらんかね。」
とお爺さんは町を歩きました。
街には品物の目利きが居て
織物をとても高いお金で買ってくれました。
お爺さんはもううれしくてうれしくてたまりません。
躍り上がるような気持ちで家に帰りました。
次の日、娘はまた織物をおりはじめました。
三日が過ぎたとき、お婆さんはお爺さんに言いました。
「素晴らしい織物をどうやっておるんじゃろ。ちっとのぞいてみたい。」
「そんなことするもんじゃない。約束をしたんだもの。」
でもお婆さんはお爺さんの言うことには耳を傾けませんでした。
「ちょっとだけ。ほんのちょっとだけ。」と言ってとうとうのぞいてしまったのです。
そうして御婆さんのみたものは、
一羽の鶴が長いくちばしを使って羽根を抜いて糸に織り込んでいる姿だったのです。
「お爺さん、鶴が機をおっていますよ。」とささやきました。
その夜、娘は織物を持って部屋から出てきました。
「正体を知られた以上、もはや私は、お爺さんたちのもとにいることはできません。
命を助けて下さってありがとう。お世話になりました」と言って、
鶴は空高く舞い上がり飛び去って行きました。
二人はさびしい思いを隠すことはできませんでしたが、それ以来、鶴の残してくれた
反物の御蔭で裕福にしあわせに暮らしたということでもあります。
めでたしめでたし。



ところで、皆さん、このお話には「続編」があることをご存知でしょうか。
「続編」を聞いてみたいとお思いの方、手を挙げて下さい。
今、手をおあげにならなかった方はよろしいんですね。
あ、お聞きになりたいですか。
それでは皆さんにお聞かせしましょう。
鶴の恩返しの「続編」のはじまりはじまり。
やさしいお爺さんの話を聞いた隣に住む欲深爺さんは
「わしもそんな話にあやかりたいもんだ」と言って、
自分で山にワナを仕掛けて一羽の鶴をワナにかけ、
わざとらしく逃がしてやり、
そして若い娘の訪問を待ち望んだというのであります。
それから娘が訪ねてきたのはよかったです、
三日たっても四日たっても娘は一向に機を織ろうともしません。
そこで欲深爺さんは、私に家にはいたのでは機を織ることもできないだろうというので、
五日目は畑に終日でかけておりました。
そして腹の中で反芻（はんすう）しました。
もしも、今日も機を織らないなら、厳しく言ってやらねばならない
「やい、娘、どうして機を織らないのだと」。
お爺さんが家に戻ってみるといって娘の姿が見当たりません。
待ち望んでいた反物はおるか、
家の中に蓄えてあった豆もお米もすっかりなくなっていたのでした。
お爺さんは地団太踏んで悔しがりました。
「さては、あれは、鶴ではなくて鷺（サギ）じゃったか」と。
今、笑えなかった人は、あとでお隣の方に聞いてみてください。
正直者のお爺さんと欲深爺さんのお話のパターンは決まっています、
では一体、私自身はどちらのお爺さんの姿に近いのかという見方で自分自身を振り返
ってみますというと、大変お恥ずかしい私であることが知られるのであります。
(お断り)

「鶴の恩返しの続編」のお話は葦原理江師の平成 20 年 9 月 13 日総代研修のご法話
から頂戴したことをお断り申し上げます。

「鶴の恩返しのイラスト」は、下記のサイトからお借りしたことをお断り申し上げます。
<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Gaien/7211/Japanese/ongaesi.html>

5. ほとけはつねにいませども

今から八百年以上も昔のお話です。
後白河法皇というお方が、今様という当時の流行歌で「ほとけはつねにいませども」と
いう歌を『梁塵秘抄(りょうじんひしょう)』の一節として歌いあげられました。
当時、迷いの世に住む人々にとって阿弥陀如来は、お救いに与る身近な存在でした。

けれども、私たちは迷いの世に生きる煩惱の身ですから、起きているときにまのあたりに阿弥陀如来様を拝見することができません。

私たちがすなおで心が清らかならばわずかに夜明け前のひととき夢の中でほのかにそのお姿を仰ぐことができるのみでありました。

この今様歌はその趣旨を歌い上げられたものであります。

でもねえ、私は思うのです。

夢の中にしろお会いできるとしたらそれはとてもありがたいことですね。

実は私は、夜寝るときに昔流行った坂本スミ子の「夢であいましょう」を歌ってねることにしています。

夢であいましょう。

夜があなたを抱きしめ

夜があなたにささやき

うれしげに かなしげに

たのしげに さびしげに

夢で 夢で 君も 僕も

夢であいましょう。

では、私たちが如来様に遇わせて戴くことはそれ以外には叶わないのでしょうか。

これは私たちにとってとても大事なお話です。

お爺ちゃんお婆ちゃん方はこの施設にお入りになる前、お元気だった頃にはよくお寺にお参りになったことでしょう。

「お寺では、さあ、皆さん、両手を合わせてお念仏をお称えしましょう」と言って称名念仏されたことでしょう。

ですから、今日、私たちもまずはお念仏をお称えしたいと思うのです。

……「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と両三度みんなで称えます……

「それじゃあ、お尋ねします。今なんと聞こえたのでしょうか」

「南無阿弥陀仏」と聞こえたのです。

ただ今きこえて下さった「南無阿弥陀仏」は、あれは、私の声を通して、実は阿弥陀如来様、私たちの掬い主である親様が直々に私を呼んで居て下さる御呼び声だったのです。

私たちはそのことに全く気付かないで日送りしています。

そこで、阿弥陀様は、自らのありかを知らしめるために、南無阿弥陀仏と称えよと称名念仏を与えて下さったのです。

阿弥陀様が「南無阿弥陀仏と称えよ」とおっしゃっていて下さるから、私は南無阿弥陀仏と称えるのです。

称えれば「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。

聞こえて下さったものは親様の御呼び声でありましたから

そのとき私は確かに確かに阿弥陀如来様に遇わせて戴いているのであります。

初めに一番を歌ってみますので続いて皆さんと一番から三番まで通して歌うことに致します。

- 一、ほとけはつねに いませども
うつつならぬぞ あはれなる
ひとのおとせぬ あかつきに
ほのかにゆめに みえたまふ
- 二、ほとけはつねに いませども
きづかぬわれぞ あはれなる
まどろむわれを よびさまし
こえになりてぞ よびたまふ
- 三、ほとけはつねに ましまして
こえになりてぞ よびたまふ
なむあみだぶと となふれば
きこゆるみなに みえたまふ

それでは最後にお念仏をご一緒にお称え申し上げてお別れすることにいたしましょう。
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏 合掌